

度のもので様々であるとの報告もある。FTDの脳萎縮の進行速度には個人差があり、発症から受診するまでの時間的差異も認める。脳機能画像検査も利用し、特徴的な臨床症状を見逃さないことが重要である。

4 保育園における運動発達支援 H25年度の報告

稲月まどか

医療法人 白日会 黒川病院

【目的】保育園の年長児に、話を聞けない、落ち着かない、衝動的で攻撃的といった症候がどのくらい存在し、それらが子供の運動能力や這い這いの既往と関係しているかを調査し、H24年度から行っている保育園児に対する保育場面での運動の励行が子供の発達や行動の変容をもたらすのかについて検討した。

【方法】H25年5月4日市町村29園583名の年長児に対し、担任記入による行動評価尺度を用いADHD様行動の抽出を試みた。また年長児の足指の動きについて8園143名について調査し、これらの保護者に対し乳児期後期の運動発達についてアンケート調査を行い、年長時点での行動評価尺度得点との関連を検討した。運動プログラム施行後、H26年2月行動評価尺度や足指の動き調査をしてその効果について検討した。

【結果】H25年5月時点でADHDRS-IVと多動性評価尺度のうち一つ以上cut off pointを超えた子供の延べ数は男児39%女児21%（全体の31%）であった。80%の年長児で足指を開いたり重ねたりすることができず、這い這いを十分に経験していない子供も半数に上った。足指の運動能力には性差があり、足指運動能力テスト得点の平均値は有意に女児が高かった。（ $P < 0.05$ ）また足指の運動能力テスト得点と行動評価尺度得点には負の相関があり（ $P < 0.01$ ）、這い這いの継続期間が長いほど行動評価尺度得点は低く、年長時の足指の運動能力が高い傾向がみられた。このため体幹をねじる、足指を使って這うなどの運動プログラムを保育の中で励行した。

H26年2月時点で行動評価尺度上cut off pointを超えた子供は男児33%女児13%（全体の24%）と減少した。行動評価尺度得点の平均値は有意に低下し（ $P < 0.01$ ）、足指の動き得点平均は有意に上昇した（ $P < 0.01$ ）。また足指の運動能力と行動評価尺度得点の間には有意な負の相関が認められた（ $P < 0.01$ ）。

運動プログラム実施後各担任に行ったアンケートでは子どもの落ち着き、話の聞き取り、運動能力、バランス能力、子供の意欲、自尊心、クラスのとまりが良くなったと評価された。アンケートの評価得点は運動プログラム実施回数と正の相関をしていた。

【結論】年長児に見られるADHD様症状のうち、運動発達の遅れや経験不足によって生じているものは日常的な運動の励行により改善するものがあると考えられる。

5 保育園における園児の行動評価について

稲月まどか

医療法人 白日会 黒川病院

【目的】保育園年長児の運動発達支援のため保育園児の行動をさまざまな指標を使って評価する。本年度は子供の心の強さと困難さアンケートを用い、保育園担任と親双方から子供の行動を評価してもらい、それぞれの評価の違いや特性について考察する。

【結果】H26年5月3日市町村9保育園138人の年長児について保育園担任からADHDRS IV、多動性尺度、足指の動きテストについて評価してもらい、子供の乳児期後期の運動形態について保護者にアンケートを行った。子供の心の強さと困難さアンケート（SDQ）は担任・親の双方から記入してもらった。

ADHDRS IV・多動性尺度いずれかのcut off pointを超えたのは男児58.7%女児22.7%で、足指の動きテストの平均値は男児5.51女児5.93で足指の動きは女児の方が高かった。足指の動きテスト結果と行動評価尺度得点は負の相関があり、

行動評価尺度得点平均は男児が女児に比べ有意に高かった。現年長児が乳児期後期歩直前までしていた運動形態は這い這いのみの者が4割で、這い這い継続期間は全体の約半数が2カ月未満だった。這い這いを短期間したのち伝い歩きをした者や歩行器に入った者は全体の約6割で、歩行器の使用期間が長いほど年長児の行動評価尺度は高くなった。また子供の心の強さと困難さアンケートによる合計困難度(TDS)との相関では歩行器の使用期間が長いほどTDSは高くなり、這い這いの継続期間が長いほどTDSは低くなった。SDQにおいては全体に親評価の方が担任評価より子供の行動に問題があると指摘する割合が高く、特に女児でその傾向が高かった。担任の評価との一致率は男児67.7%女児50.7%で有意差が認められ、女児の親が子どもの行動を問題視する傾向にあった。

【考察】H24年度から継続して行っている保育園年長児の行動についてのこれまでと同等の調査では概ね例年並みの結果が得られた。今年度は新たにSDQを担任・親の双方に導入し子どもの行動の評価について比較した。SDQによると親は担任より子供の行動を問題ととらえる傾向があり、女児の親にその傾向が高かった。これは女児の高い社会性といった特性によるのかもしれないし、親が女児の行動に対してより関心や期待を寄せているからかもしれない。また集団においては担任が全体の中で目立つ男児の行動にとらわれ女児の行動に目を向けにくいのかもかもしれない。今後運動プログラム施行後の行動評価の推移をみるほかに、問題行動を持つとされる子供の相談場面ではどこで誰が問題視しているのかも有用な情報となると考える。

6 Lithiumにより甲状腺機能が亢進した1症例

菊地 佑・田尻美寿々・高須 庸平
信田 慶太

県立小出病院 精神科

【はじめに】甲状腺機能異常は、自律神経症状を呈する他、抑うつ、不安・焦燥、不眠などの精神症

状を生じることがあり、気分障害による症状との鑑別が必要となる。Lithiumは主に双極性障害などの治療・予防に用いられ、その副作用の一つとして甲状腺機能低下症はよく知られている。一方で、稀ではあるが、甲状腺機能亢進症の報告も散見される。Lithiumにより甲状腺機能が亢進したと考えられる症例を経験したため報告する。

症例は73歳、女性。X-16年5月に不眠、食欲低下、抑うつ気分が出現。うつ病として同年8月20日～9月9日まで当科に任意入院し、Clomipramine主体で加療された。X-14年4月に多弁、睡眠欲求減少、食欲増進、友人宅へ頻繁に出掛け、誇大的な発言が増加した。軽躁状態と判断され、双極II型障害に診断が変更され、Clomipramine中止、Lithium max800mgに置換された。以後、Li400mgで明らかな気分エピソードを満たすことなく経過した。X-1年10月に夫が脳腫瘍でA病院に入院した。唇病疲れなどもあり、抑うつ・不安が出現した。X年3月28日、加療目的に当科に任意入院した。

【入院後経過】入院時の採血でLi血中濃度が0.36と低値であったため、Liを800mgへ増量。1週間後の採血でLi0.72、更に1週間後0.78で推移し、病棟内では不安の訴えも軽減していた。5月初旬より、不眠の訴えが増加し、不安・焦燥も増強し、「今までと違うんです」「どうしていいかわからない」と訴えることが頻繁となった。5月9日の採血でLi1.13、fT3、fT4の上昇、TSH低下を認めた。Liとの関連を疑い、同日Liを中止。数日後より夜間も比較的良眠得られるようになり、不安・焦燥も軽減した。甲状腺ホルモンも並行して、基準値内へ改善した。甲状腺自己抗体は陰性であった。

【考察】本症例では、生検は施行しておらず、甲状腺の病理組織学的な検討はなされていない。しかし、甲状腺自己抗体は陰性であり、lithium中止後に甲状腺機能の改善がみられている点から、lithiumにより甲状腺細胞が直接傷害された可能性が考えられた。Lithium投与中は、甲状腺機能のモニタリングの継続が必要であるとともに、不安・焦燥、興奮などの精神症状が出現した際には、甲